

福田 昌湜

幼い頃から、わたしは自分の中の何かが壊れていると思っていました。どこがどうといったこととは解らぬまま、何かが壊れていると。それをハッキリと自覚したのは、大学に入ってからです。ゼミの主任教授に、君たちは壊れている、それもキレイに壊れていると宣告されたからです。教授の認識は世代についてのものでした。戦後の高度経済成長と共に育った、団塊のわたしたちに対する社会学的な分析でした。

簡単にいえば、大量生産、大量消費の市場経済の発展が人間の何かを壊し、その只中で育ったわたしたちは、まさにキレイに壊れた人間でした。遠くは西洋近代文明が人間の生の感覚を希薄にし、戦後はアメリカの消費文化が人と世界を更に分断した。そういうことだと思います。

少子高齢化とは子どもを生まないという選択が少なからずあり、寿命が延びたことの結果ですが、生まない理由はそれぞれあり、産めない理由もそれぞれあります。子どもを生まない選択は、本能に関わる問題だと思います。しかし、子どもを生まないことイコール欠損ではありません。繰り返しますが、人には人の数だけ理由(わけ)があるからです。た少なくとも、わたし自身に限って言えば、それは壊れていることの一つの証左です。

最近ある本を読んだのですが、子どもが山に喩えられていました。冒険、探検と呼ばれる危険な登山を専らとする人の言です。子どもは難攻不落の山で、子育てとは山を攻めるこ

と同意という意味です。登山家が生の危険を顧みず未踏の山に拘って登山をすることは、ある種の表現です。そこで示される生の実感はパフォーマンスであり、表現行為に他ならないのです。恐らく子育ても生や自然を実感することであり、それに触れることです。又、一人の人間を育てる困難さと喜び、それと地図の空白を埋めるような登山には共通点があります。その伝でいけば、子育てと美術も非常に近いところにあります。子どもの成長と制作、つまり未知の表現のプロセスは似ていますし、美術も又、人間の生を扱うものですから。

他方、美術を含む表現行為は欠落(何かが欠けていること)から発生します。人の成長過程で何かが欠けてしまい、それを埋め合わせるために、表現が生まれます。充足した人生には表現は必要ありません。誤解を恐れずに言えば、犯罪も表現の一つであり、美術家と犯罪者は意外に近いところで存在しています。キレイに、見事に壊れてしまったわたし。

壊れたわたしは再生産することを拒んで子どもを作らなかったのでしょうか。

多分にそんな気がしますし、多少とも作品にはそんなわたしの実像が反映されていると思います。

2016 年 6 月

ふくだ・まさきよ

1949 年山梨県甲府市生まれ。法政大学社会学部、創形美術学校版画科卒業。1980 年代から 90 年代にかけて美術展示を複合させたカフェ & バー「西瓜糖 (すいかとう)」(東京・阿佐ヶ谷) を運営。現在は山梨県内の元自宅の一角を i-gallery DC と名付け、個人の作家をクローズアップする企画展示を定期的に行っている。既婚。